13

本邦篤志解剖第一号の執刀者と三田村日誌

宮下　舜一

明治新政府によって復活した旧幕「医学所」は、明治二年二月「医学校兼病院」となり医育機関として新しい歩みを始める。

同年八月十四日、この医学校で実施された「美幾（みき）」女の屍体解剖は本邦における自願篤志解剖の第一号として広く知られている。然し不思議な事に、この記念すべき解剖の具体的剖見記録が存在せず、主役となるべき執刀者も判然としない。

筆者は、当時医学校に在学中であった元開拓使医官、三田村多仲の日誌の中に今までしられていない「美幾」女の剖見記録を発見した。今回、この三田村日誌を紹介すると共に新知見を踏まえた観点から関連する論説にも考察を加えてみたい。

明治初期の医学校（大学東校）で最も熱心に実地解剖に取り組み自ら解剖局の管理にも当たった田口和美（初代東大解剖学教授）を「美幾」女解剖の執刀者と推定する記述が多く見られるが、これは田口が書き残した次の様な回顧記録の影響と思われる。

「……入院患者娼妓みき女の屍体を生前の請願により剖観したことは当代に於ける実地解剖の濫觴である。……みき女の屍体を内蔵より四肢筋肉に至るまで解剖したる時に説明の労を取られた桐原眞節君はこの時代では解剖の事についてこの人の右に出るものは無かった……」

この内容から、桐原眞節が指導執刀者として最適任との考えも浮かぶのであるが、小金井良精の論文には「当時桐原氏は解剖の講義は行ったが、屍体実地解剖で執刀はしなかった」とあり、又田口和美についても、氏は明治二年八月頃は入学間もない生徒であり、解剖に特に興味を感じて勉強を始めたのは三年正月句読師を拝命後であろうと言う。その他重要な記録として、田口和美の死後追悼録中に「……みき女の屍体を剖検せし時、（田口）

先生は左上肢の筋肉を解剖せられ……」と記載がある。

以上の様な諸文献を総合すると「美幾」女の解剖には生徒有志が参加して（生理）実習解剖が行われ、解剖教師桐原眞節が指導説明に当たった事が判明する。田口和美も生徒の一人として左上肢を担当してメスをもったが、実習生徒の立場での事で（指導的）執刀者ではあり得ない。

「美幾」女の解剖に於いて、前述の実習解剖とは別に英医ウィルス執刀による恐らく内臓主体の病理解剖が行われた事が三田村日誌によって判明する。

三田村多仲は越前南条郡出身の医師で、明治二年三月東京遷都に際し、典医（天皇侍医）平野大隅介の随員として同月二五日東京に到着している。日誌は京都からの道中日記に始まり、同年五月には医学校に入学し、ウィルスに従って、外科臨床を学んでいる様子も日記に見える。次に注目すべき「美幾」女の解剖を示す日記部分を原文で掲げる。

「（八月）

十三日　四日　大病院学寮ニ於テ

女ノ開胞（ママ）有　ウエルスに付器械方

被申付候事　其時

筆生　坪井先生〔為春〕

通辯　司馬凌海　」

特に説明も無く簡単な記載であるが、末期の梅毒症患者として死亡した「美幾」女の病屍体に就いて、医学校では最高のスタッフを動員して、二日間に亙る綿密な剖見検索を行った事が伺われる。三田村多仲はたまたまウィルスに付いて外科診療を学んでいた関係で、生徒ではあるが器械方としてこの剖見に参画する幸運に恵まれたのであろう。

要約すると、篤志解剖第一号「美幾」女の病屍体剖見は英医ウィルスの執刀示説により二日間に亙って行われた事が三田村日誌から確認される。この病理解剖に続いて生徒を対象にした実習解剖が行われ、解剖教師桐原眞節が指導説明に当たった。生徒田口和美は実習解剖で左上肢を担当した。

（北海道医史学研究会）